

(別紙1)

尼崎市支え合いを育む人づくり支援事業 教育・研究活動事業実績報告書

教育・研究活動名	持続可能なコミュニティの形成をめざした多世代型居場所づくりプロジェクト			
申請大学・高校等名	大学・高校等名	関西国際大学		
	活動グループ名	福祉学専攻インターンシップ	参加学生等人数	18人
指導責任者名 及び連絡先	学部・学科等名称	教育学部教育福祉学科		
	責任者氏名	尾崎慶太	連絡先電話番号	
	E-mail			
協働する市民活動団体 及び代表者名	団体名	企業組合はんしんワーカーズコープ、三和本通商店街振興組合		
	代表者氏名	代表理事 馬場 義竜	連絡先電話番号	
	E-mail			
教育・研究活動目標	本授業は、尼崎の地域課題に取り組む市民活動団体はんしんワーカーズコープとの協働活動を通して、ソーシャルワークの基礎である住民主体の観点や人権感覚を養うことを目的とする。当団体のコミュニティスペース地域共創Lab.を拠点に、三和本通商店街や潮江/小田地区での活動を通して、地域課題の発見から住民と共に解決するプロセスを理解し、多角的・多面的な考え方をもち、大学での学びを深化するためのプログラムを展開する。			
活動内容及び実績、評価	【活動内容及び実績】 本プログラムは、2018年度から2020年度の活動で培ったノウハウと、2020年度のコロナ禍で実施したフィールド調査で得られた結果をもとに、「多世代型居場所づくり」をテーマとして進めた。 これまで協働してきたはんしんワーカーズコープに加え、活動のフィールドである三和本通商店街の振興組合とも協力関係を築きながらのプログラム展開であった。2021年度も新型コロナウイルス感染症により、活動を制限せざるを得ない状況であったが、おおむね以下の流れで活動に取り組んだ。 ○2021年6月-7月 2020年度に実施したフィールド調査の結果から、「多世代型居場所づくり」を大きなテーマとして、大学生が実行できる企画を検討し、7月の三和本通商店街振興組合理事会にて、提案をおこなった。活動趣旨および活動内容について、了承された。また、三和本通商店街を活性化する有志グループ(ちゃり恋会議:のちに三和みらい会議に名称変更)内で検討されていた活動と共通する点があったため、一部協働で進めることになった。 ○2021年8月 居場所づくりの拠点は、来恋夢神社横スペースを活用することになった。ちゃり恋会議で検討されていたプレイスメイキングのプロジェクトと協働で、同スペースを人が滞留できる空間へのリフォームするDIYを実施した。 同時期に、県立尼崎小田高校とも交流する機会を設け、リフォームDIYには高校生も参加があった。 ○2021年10月-12月 10月から、週3回(月、水、土)の午後に、学生が運営する多世代型居場所スペースを開所した。開所当初は、来所する人が全くない状況が続いたため、学生企画のイベントを10月中旬に開催した。特に子ども向けの縁日を企画した。商店街のみならず、近隣の幼稚園にも配布したことで、当日は多くの参加があった。このことがきっかけとなり、居場所スペースには10-20名程度の小学生が遊びに来るようになった。その後も、11月と12月にイベントを開催し、子どもだけでなくその保護者も楽しんでもらうような内容を実施した。このスペースは12月で活動終了とした。			

(別紙2)

	○2022年3月 本プログラムの活動成果をポスター(別添資料)にまとめ、尼崎中央北生涯学習プラザに展示し、広く市民に向けて活動報告を行った。 【評価】 ○想定していた活動成果に対する達成度合い(達成できたこと、できなかったこと等) 本プログラムは、過去3年間の実績をベースにしていることから、はんしんワーカーズコープや三和本通商店街振興組合との関係性が構築されており、居場所スペースの企画提案や実施は比較的スムーズに実行することができた。とりわけ、ちゃり恋会議で検討されたプレイスメイキングプロジェクトと連携し、居場所スペースを関係者とDIYをすることで、地域住民と共に創るということを学生自ら経験することが可能になった。また、そのスペースに定期的に子どもが遊びに来るようになったことから、創出した空間は地域にとって意義深いものになったと思われる。 しかし、2020年から続く新型コロナウイルス感染症により、当初予定していた活動時期よりも短期間での活動になった。当初は「ゆるくながく」をイメージしながら企画していたが、学生の活動期間が限られていることから、短期集中で実行せざるをえなかった。そのため、活動を通して地域住民と十分なコミュニケーションをとり、活動の問題点とその改善を期間中に実行するまでには至らなかった。 ○学生等が関わった地域、団体の活動の変化等 振興組合と連携することは今年度で2年目となった。理事会で学生による企画提案をした際にも、全面的に了解いただいており、若い世代の学生が商店街に入りこむことによって、高齢化問題を抱える商店街の活性化に寄与できたと思われる。また、普段は子どもが集まる空間がほとんどない空間に学生、小学生が集う状況を創出することが実現できたことは、周辺の商店街各店舗にも少なからず影響を及ぼしていると見込める。ただし、この点についての検証は行っていない。学生の活動を地域のみなさんと共に実行していくために、学生「だけ」の活動にとどまらず、商店街各店舗や地域住民との交流をこれまで以上に深めていくことが今後の課題となった。 ○学生等の学習意欲、地域に対する考え方の変化等 本プログラムの特徴は、フィールドワークをもとにして、そこで発見した問題点に対して、解決策を検討し、実行するところにある。過去3年間の活動を踏まえ、改めて大学生自らが地域に入り込み、課題を発見するプロセスを重視して活動を進めた。参加学生のなかからは、地域にある問題に気づいたり、他地域の商店街活動でも活動するようになったりと、地域課題に関心をもつ学生が増えている。また、ゼミでの研究レポートで地域福祉実践をテーマに取り上げるなど、学習にもつなげている学生がおり、学習やその他課外活動への波及効果がみられている。
--	---

※報告書の内容及び掲載写真は、市HP等の市の発行する媒体への掲載される場合がありますので、事前に学生等の同意を得た上で、提出をお願いします。